

竹山

756

256

233

特41
756

平野簡

諸國一見の僧より我は

南都七堂よりまのてんより

初瀬のまのてんより

人より寺より入るは

程よりまのてんより

此は原寺のいより

治
49.2.17
内交

乃其婦佳給ひしるのわら
あべいふまきと興津自安ん
山と諒もきしも世可きこの
る昔後乃給ひる其業平乃
友とき紀乃多帯のつねなき世
嫌背も悪く飛ぶくトナリ時ごと
るあつめく目もあつめく

はあまのたよもの麻ま秋乃あ
くあまのあまの古寺の庭乃松風更
るも目もあつめく行端のあつめ
まきりまきりまきりまきりま
るあつめくあつめくあつめく
あつめくあつめくあつめく
あつめくあつめくあつめく
あつめくあつめくあつめく

ひんたんと法入の聲ヒノトノトノノに
 けき給ケキふ言コトひヒくクさサまマもモとトくクえエくク
 名月乃ナツキぬヌ西ニのノあアはハどド謙ケンハハ
 方のカタ杖シヅメ乃ノ定サダメ松マツのノまマいイのノまマいイ
 乃ノ普フすス乃ノ普フすス乃ノ普フすス
 此コノ書シヨのノまマいイのノまマいイ
 此コノ書シヨのノまマいイのノまマいイ

此寺の本願は貞の業平を世よ
 名はあふ人なり。たむ其時の影も
 是成塚の陰も後ちらむも委しく
 まらぞまら是コノ女メのノあアくクつツのノ佳ツキ者モノ也
 のノ氣キをセみミえエんンのノあアらラのノあアらラのノあアらラ
 掛ツクひヒあアまマ者モノ者モノらラとトもモ。是コノ成ナリ成ナリ向ムカフ
 此寺の本願は貞の業平を世よ
 名はあふ人なり。たむ其時の影も
 是成塚の陰も後ちらむも委しく

世に於ては其の業率より其の時たゞの昔男
の業率より其の時たゞの昔男
の業率より其の時たゞの昔男
の業率より其の時たゞの昔男
の業率より其の時たゞの昔男
の業率より其の時たゞの昔男
の業率より其の時たゞの昔男
の業率より其の時たゞの昔男
の業率より其の時たゞの昔男
の業率より其の時たゞの昔男

同業率より其の時たゞの昔男
の業率より其の時たゞの昔男
の業率より其の時たゞの昔男
の業率より其の時たゞの昔男
の業率より其の時たゞの昔男
の業率より其の時たゞの昔男
の業率より其の時たゞの昔男
の業率より其の時たゞの昔男
の業率より其の時たゞの昔男
の業率より其の時たゞの昔男

并

同

上書
名づるは在厚素の松ありてかく松
毛者たる塚の墓是社されよあま
酢乃村とくまの穂は出るらるの
名好あるらん草をきくして露澤と
と古塚の真あるれい人の松あり
うし言動せられく保野
物と業平の
出事ましくはも諸人
昔在系の

中將平人く愛は儀のむらり書も
弟のま月の秋とて信守はよ其
は紀乃有常が娘と契り妹背入心
あさからちりまは又け内國たらむその
里まきり入あつて二道はよ世がうて通ひ
給ひよは内少まはたつ白波立田
山あまや君が得ゆくらんとあほつら

あらゆるものもいかにいかに思ふに思ふに
 するの業もいかにいかに思ふに思ふに
 たかみもいかにいかに思ふに思ふに
 此國は人の有きも昔もあつて
 門の前もいかにいかに思ふに思ふに
 かさしてたがひは思ふに思ふに
 らもいかにいかに思ふに思ふに

目もいかにいかに思ふに思ふに
 今もいかにいかに思ふに思ふに
 乃露の玉章のたもいかに思ふに思ふに
 上女
 井筒もいかにいかに思ふに思ふに
 ちらもいかにいかに思ふに思ふに
 みる程もいかにいかに思ふに思ふに
 わきもいかにいかに思ふに思ふに

あぐまにひし讀し故あれやつ
井筒のまじりてきこえし有常の娘
乃古き名ありべし
物語の娘あるか様のおやしや名
葉たのませし神の神志恵まらむ
紀乃有常の娘とて白波のま田
山よりかかきりてまのたき

まも依き熟田のまのまの
紀乃有常の娘とて又井筒の
女も
や志の縄のあがまを繋ぎ奉らつ
井筒のついでにのれまらり
更に分ち在願寺のよる月
昔をたのむ家手も夢あうてり

松茸もけりは郎カサはさきく
あつちりはなす社名にき櫻花
年々もあつちりもさきりうら
後にもおあつちり人情もいれ
あり我つ井筒の昔よりまの規
引年々へて今もあつちり業年
筐カサのあつちりカサおあつちりも昔

男はうつり舞カサ おもひも花の袖カサ

家もさき昔ぞあつちり在原乃カサ 寺井カサ
よもあつちり月ぞあつちり月カサ 目也カサ

あらぬ美也昔と詠めも何のほろカサ やカサ

井筒カサ のなす我カサ 筒のさきカサ
あつちりかたきカサ 若もさきカサ 若カサ

きりてやカサ 若はかたりみきりカサ 昔男カサ

中

下

256
233

複製不午

宗家
親世

明治廿二年六月廿五日從
同 廿四年一月廿八日迄 出版御届濟
同 四十三年四月廿五日從
同 四十四年十一月廿五日迄 再版
同 四十四年二月十五日別製本御届

發行熱
印刷者

京都市上京區三条通美屋町東元角

槍 常 之

(特電話二五)
（振替野金六院三ノ本）

常之

訂正者 親世清

親世清

此冠の原一王ニシテ一ツノ業
平乃面影ノ妻トシテ一ツノ業
らあひりや亡婦ノ妻トシテ一ツノ業
める花の色あうて白ひありて在原
の寺乃鐘もほのく月まはる寺
乃松乃やまを越えの夢も返ら
醒まきりゆめ返まきあきまらる

